

大腸がんは肉食、肥満、糖尿病、運動不足などが原因となる「欧米型」のがんの代表です。多くは、大腸粘膜の細胞からポリープ（腺腫）と呼ばれる良性の腫瘍が発生し、その一部ががん化して増大したもので。

ただ一部の大腸がんでは、発がん刺激を受けた正常粘膜

から、腺腫を経由せずに直接がんが発生する場合もまれにあります。

とくに、腺腫が大きくなると発がんリスクが高くなりま。直 径 1 センチメートル以上では 3 割弱が、がん化するというデータもあります。

日本では、40 歳以上に対し毎年 2 回の便潜血検査が住民検診として行われています。

す。痛くもかゆくもないこんな簡単な検査で、進行大腸がんの 90% 以上、早期大腸がんの約 50%、腺腫などのポリープの約 30% を見つけることができるときっています。

しかし、アメリカは別の方法で大腸がんを劇的に減らしています。大腸全体を内視鏡でチェックする「全大腸内視鏡検査」です。

内視鏡による検査は、がん

を早期発見するとともに、腺腫を見つけ出して除去することができます。受診者にとって受け入れやすい 10 年に一度という検査間隔であつたこともあり、2016 年には全米で 50 歳と 75 歳で過去 10 年に内視鏡検査を受けたのは 60% 以上に上ります。

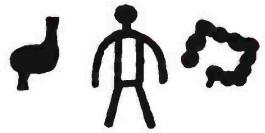
この結果、もともと日本人の親者が 48 歳の若さで亡くなりました。前がん病変と言える大腸の腺腫どちらがって、胃のポリープの多くを占める「胃底腺ポリープ」は、ピロリ菌感染のない健康な胃にできるもので、胃がんにならないサインとさえ言えます。

同じポリープといつても、胃と大腸では、危険性が大きく違うのです。

（東京大学病院准教授）

がん社会 を 診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

危険性高い大腸ポリープ

とくに、腺腫が大きくなると発がんリスクが高くなりま。直 径 1 センチメートル以上では 3 割弱が、がん化するというデータもあります。

日本では、40 歳以上に対し毎年 2 回の便潜血検査が住民検診として行われています。

内視鏡による検査は、がん

を早期発見するとともに、腺腫を見つけ出して除去することができます。受診者にとって受け入れやすい 10 年に一度という検査間隔であつたこともあり、2016 年には全米で 50 歳と 75 歳で過去 10 年に内視鏡検査を受けたのは 60% 以上に上ります。

この結果、もともと日本人の親者が 48 歳の若さで亡くなりました。前がん病変と言える大腸の腺腫どちらがって、胃のポリープの多くを占める「胃底腺ポリープ」は、ピロリ菌感染のない健康な胃にできるもので、胃がんにならないサインとさえ言えます。

同じポリープといつても、胃と大腸では、危険性が大きく違うのです。

（東京大学病院准教授）